

KTK ひゅうまん 京都

No. 539 2021年10月号

編集／京都障害児者の生活と権利を守る連絡会 〒603-8324 京都市北区北野紅梅町85 弥生マンション内
編集発行責任者／池添 素 電話&FAX(075)465-4310 購読料 1部80円 年間購読料1,000円(送料実費)

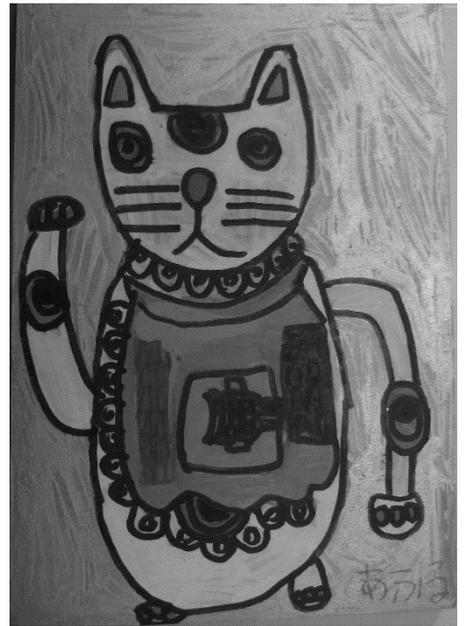
- P.1 左大文字 つどめ
- P.2 常任委員会から 池添 素
- P.3 障害のある人の暮らし 沖田友子
- P.4 血の染みついたバトン 中村 暁
- P.5 障害者と共に歩んだ京障連の50年 松本 美津男
- P.6 科学と障がい 垣田
- P.7 つれづれあらぐさ 中山 恵美子
- P.8 2+2=詩 富士一文
- P.9 障害のある人の権利を守る北障連から 濱中 博
- P.10 365歩のマーチ 安藤 史郎
- P.11 知っ得情報 松本 美津男
- P.12 シンポジウム報告 大西里江

左大文字

「介護の社会化」再考

昨年来の介護保険法施行30年を機に「介護の社会化」を再考している。▲「介護の社会化」は介護保険の制度導入の旗印として掲げられてきたテーマではあったが、家族と介護の関係に関しては必ずしも十分な議論の成熟があつたわけではなかった、という思いがあつたからである。▲「介護の社会化」の周辺で語っていた「介護はプロに、家族は愛情を」というコピーが、当時流布したことを覚えている。このコピーをタイトルにしたある図書の帯には「介護は『行為』です。『思い』ではありません」とあつた。介護サービスを利用することのステイグマを剥がすには一定の効能はあつたとは思ふが、この無機質な介護行為論に不信も禁じ得なかつた。介護という営みを貶めることにも加担するのではないかと▲家族とは何か。家族介護者を支援する根拠は何か。私の不信にはこうした論点が内包していた。障害のある息子と暮らす生命倫理学者・玉井真理子はケアとは何かと問い「心を砕きつつ手足を動かすこと」といつている。心を砕くことのない行為も、手足を動かさない思いもケアとは違うのではないかと、ということだ。玉井の説くケアに私はより深い共感を覚えている。▲「介護の社会化」とは「介護の私事化」から脱出することではあつても「介護の外部化」と同義ということではないはずである。

つどめ



「招き猫」
渡辺あふる

常任委員会から

〈投票に行こう!〉

日本人はほんとに物忘れの名国民の命とくらしを守るために。わずか二年前のことでもなかったことになる国。政治も都合悪いことは隠ぺいしてしまう体質ではあるが、それを許す国民性もそれを後押ししている。「今こそ思い出そう!」と叫びたい。いったい与党政権はコロナ禍で何をしてくれたのか? 思い出してみよう。「アベノマスク」は役に立ったか? PCR検査は間に合ったのか? ワクチンはスムーズに打てたのか? 休業補償は十分だったのか? 医療従事者や病院への対応は十分だったのか? 保育、学童保育など、子どもたちが通い、働く保護者を支えてきたところへ、手当はされたのか? どれもこれも、いやもつともつと、この紙面では足りない「NO」ば

かりではなかったか。つまり

〈コロナとサヨナラか〉

野党共闘、私たちができることは投票に行くこと。この二つが実現すれば、誰もが安心して生きていることができる社会に一步近づけると思う。

のことばかりで、右往左往と緊張の毎日やはりどこかで気持ちにストレスがかかっているのでしょう。家族のあり方や人間関係を見直すことにも目が向いたのではないでしょうか。その中でも人間の知恵はすごいなと感じた2年間でもありました。Zoomの技術も向上し、工夫して対面の会議も開催してきました。このスキルは無駄にしないなど感じるこの頃ですが、それでもやはり実際に顔を見て話せる幸せも、少しずつ戻ってきた対面お仕事で実感しています。そして今思うのは、このタイミングで感染したらいやだな!と。やはり感染対策はいつまでたつても緩められない。

〈力を貸してください〉

今回の『ひゅうまん京都』で特別なお願いのお手紙を入れています。カンパの願いはこの時期心苦しいのですが、京障連

を運営維持していくにはやはり資金が必要です。50年を超える歴史をたどれば、蜷川民主府政の遺産から始まり、よくぞここまで組織をつないできたものだと思います。多くの民主団体や組合が自分の組織を維持することにたいへんな中で、本当によく支えてきていただいたと思います。感謝しかありません。

これからも皆さんには、組織、団体ではなく、個人の皆様に、個人会員として、年間千円の会費で機関誌を購読していただければ、京都の障害者運動の灯を一緒にともしていただける力になります。今回の資金カンパと、個人会員へのお誘いを心からお願ひします。

池添素 (京障連事務局長)



障害のある人の暮らし

誰とどこに住むか選択できる権利を！

沖田友子

息子が入居するグループホームから見えてくるもの④

経営再建のための方策として打ち出された、この連載①でお伝えしたグループホームの宿泊日数を5日から4日に縮小するという実施月10月に入った。今

まで金曜の夕方は一週間の疲れがたまっている時間帯で、食後はゆったりと入浴してホームで宿泊していたところだが、生活介護からホームに帰った後、散歩に出かけ夕食のお弁当とお茶を購入、入浴して帰宅するという新たな過ごし方を始めています。幸い、本人の混乱はなく「なんで今日は家に帰るのや」ということはないようだ。生活介護が終わったらそのまま自宅に帰る人が多いため夕食をホームで

食べる人数が普段より少なく、食べることに集中できており、

新しい流れをスムーズに受け入れてくれたと支援に入っていただいているヘルパーさんから聞いて安心した。

自宅に帰ると本人は土曜、日曜の外出から帰宅した時と同様に、何か食べるものはないか、自分の好物を準備しているのではないかと台所に行って「食べたい」と訴える。「もう晩御飯は食べてきたやんか」と冷蔵庫の前でのやりとりは納得する。しばらくテレビなど見た後は「もう寝る時間やな」とトイレ介助、服薬介助、就寝準備の着替え、歯磨きなど一連の介助を私が行う。フルタイムではなくなっていたけれども一週間の仕事が終わ

り、金曜の夜だけは少し夜更かしても翌日は好きなだけ朝寝できる唯一の日だったし、夜間の排せつ介助は年齢を重ねていくと身体にこたえるものがある。

10月はこのような週末が続く。11月からは重度訪問介護の制度を使ってホームで金曜もヘルパーさんと宿泊して土曜に帰

るといふ流れに戻す段取りで新しい事業所をお願いして進んでいるところである。

障害のある子どもを親が自分の身体を労わることなく「身を削りながら」介護しなければならぬのか、親自身の心身のことも含め障害者のいる家族世帯24時間のことを考えてよりよい方向に導いてくれる支援者が必要ではないか。家族だけではやりきれないということを胸を張って言ってもよいのではないかとと思う。家族も自分の人生を生きていくことができる社会、「親亡き後」というワードではなく青年期、成人期の自ら家族を作ることが難しい障害の重い人の自立した暮らしの課題としてとらえる視点を「障害児者の暮らしを考える会」に出会い、教えてもらうことができた。各地で取り組まれ成果を出されている運動について次回は知っていただきたいと思う。



血の染みついたバトン

中村 暁（医療ジャーナリスト）

⑩ 渦巻くコロナ禍の現実

新型コロナウイルス感染症の新規感染者数が減少し、緊急事態宣言が全面解除された。1日あたり新規感染者数としては過去最高の2万5866人（8月20日）は、昨年末から年始にかけての最高7957人（1月8日）の3倍以上で、猛烈さを示している。それがなぜ減少したのか。政府や専門家は「なぜ減っているのかわからない」と発言しているii。理由は今イチわからないが、減ったから緊急事態宣言を解除、というのが実際のようなのだ。

一方で今後の感染拡大や重症化防止につながりそうなニュースもある。軽症から中等症の患者へ点滴で投与して重

は罪である。一方で、若い人たちがワクチンを打っていない、という問題がある。確かに20〜30代の2回目接種率はぎりぎり4割前後。その理由を「SNSのデマに振り回されているからだ」と、半ばデマを信じてしまう若者自身の問題として批判する傾向が強い。でも本当にそうか。最近、後藤道夫さん（都留文科大名誉教授）と話す機会があった。後藤さんは若者の接種率とネットデマの関係について、一面はそうかもしれないがと前置きした上で、「彼らは打ちたくても打てないんじゃないか。接種のための休暇や副反応が出た時の休暇が取得できないような雇用形態に彼らが置かれている」ということは本当じゃないのか」と言われたのである。私も実は「ったく、若いやつらはスマホばっか見てるから

な」と思っていたので、「あ」と思った。コロナに立ち向かう医療技術の発展はうれしい。しかし「医療」という狭い枠組から少し顔を出してみると、そこには壮絶なコロナ禍の現実が渦巻いている。昨日から、警察庁の統計を眺めている。自殺者が増加している。子どもたちの自殺も過去最高を上回る勢いだ。医療は感染対策の重要な一部だが、全部ではない。発言する者に求められるのは全体を把握する努力だと自戒をこめて、思う。

i NHK 新型コロナウイルス特設サイト 2021.10.8 閲覧
<https://www3.nhk.or.jp/news/spcial/coronavirus/data-all/>

ii 共同通信社 2021.9.29 配信
<https://news.yahoo.co.jp/articles/686a31d113d93ee4e801d9751b6a04798a9efab>

iii ヤフーニュース
<https://news.yahoo.co.jp/articles/686a31d113d93ee4e801d9751b6a04798a9efab>

障害者と共に歩んだ京障連の50年（10）

京障連代表委員 松本 美津男

調査・点検・相談活動にも

取り組む

○自治体雇用の実態調査（84年9月）

障害者の自治体雇用の実態を京都市府が明らかにしないため府下自治体における障害者雇用実態調査を実施し亀岡市を除く全自治体から回答を得る。

○支援費制度準備状況アンケート調査（02年）

支援費制度が始まる前に各自治体に準備状況のアンケート調査を実施し80%の市町村から回答が寄せられ、「万全に準備できている」市町村は0、「ギリギリの準備でトラブルなどが生じるであろう」間に合いそうもない、出来るなら実施を延期して

の回答が50%をこえた。また、

03年6月市町村に対する「支援費制度施行状況に関する調査」を実施。

○京都駅の点検

1981年、障全協の提唱による全国運動に応じて、障害者ボランティア、建築家など30名で実施。京都駅改善を求めて駅長交渉（83年）



1996年、国労や京都市職労、新建築家技術者集団などの協力を得て実施。マスコミにも取り上げられる。

○道路点検調査活動を府立大、学水野ゼミの協力で実施。

○年金相談会

1978年、府職労年金支部の協力で年金相談会を月1回実施。相談件数は少なかったが一人の年金支給が実現。

○障害者なんでも相談会（79年）

民主府市政推進と復活のための取り組み

京障連結成時の宣言の中で「誇るべき京都の民主府市政を、断乎として守り抜きます。なぜならば自治体としての一定の限界はあるにもせよ、それが民主的な府市政であるかぎり、われわれの諸要求のある程度の実現は可能であり、さらにこのような自治体の輩出によって、わが国の政治の基本

的姿勢を変換させることも、やがては可能となることを、確信するからにはほかなりません。」と述べているように、その時々々の知事選、市長選をさまざまなスタイルで取り組んできました。

府市民集会はその一環ですが、1978年には京障連が提起して「明るい民主府市政を進める障害者、難病者の会」を結成して知事選を取り組みました。

そして1982年には「新しい民主府政の会」の調印団体となり「民主府市政をすすめる社会福祉の会」に加盟して知事選、1985年には「新しい民主府政をつくる会」に結集して市長選、1986年には「新しい民主府政をつくる障害者・患者・家族の会」を結成して知事選をとりくんでいきます。

近年は、団体としてのとりくみにはなっておらず、役員個人が選挙をとりくむというスタイルになっています。

科学と障がい

弁護士・垣田

2020年9月、私は、英語 様々なバリアフリー情報を発信 学習を始めました。英語学習と しておられます。彼自身も車いす ヨーザーです。

毎日、NHKの英語のラジオ番組を聴くという簡単なもので す。しかし、これがなかなか面白く、現在まで約1年、続いています。

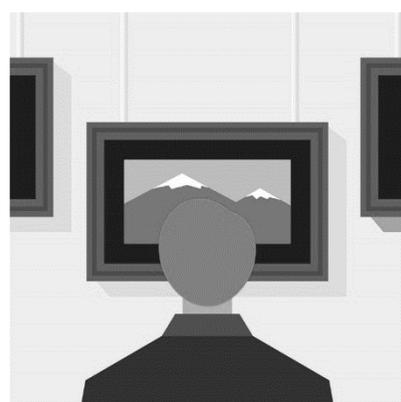
このインタビューは、私にと っ て、車いすユーザーを始めと する障がいをもつ方々の移動の 自由について改めて考えるきっ かけになりました。

私が聴いているNHKのラジ オ番組の1つに、「ラジオビジネス 英語」というものがあります。 この番組の2021年7月期 に、ジョシュ・グリズデイルさんへのインタビューが紹介され ています。彼は、「Accessible Japan」という障がいをもつ訪日 外国人のための観光情報サイト の開設者で、このサイトから、

ヴァーチャルやインターネット の可能性を強く感じると同時

最近では、インターネットや 科学技術の進化により、リアル とヴァーチャルの境目が薄れ、 生身に縛られない活動域が広が ってきています。昨年から続く 新型コロナウイルスによる変化で、実際 の移動の必要性を考え直す機会 も増えました。

しかし、私は、この新型コロナ による生活の変化によって、



に、リアルでの体験やコミュニケ ーションの大切さも強く実感す るようになりました。直接に出会 い、話し、体験し得られるものが、 どれ程感覚的なものであるか、そ してそれがどれ程心を動かすも ので、思考を促すものであるか を、気づかされたのです。

ちょうど今この季節、京都では、 たくさんさんのアートイベントが開 催されています。私は、インター ネット上で、大体の作品を見てか らイベント会場に行くのですが、

会場での感情の渦巻きは、インタ ーネットを通してのものとは、比 較になりません。会場や展示方法 も作品の一部ですから、正に体験 することになり、そこで得られる 気づきは、実感を伴って、心を揺 らし、作品との対話が生まれ、思 考が広がるように思います。

前回の和田弁護士の寄稿で、ジ ョナさんは司法で、ノアさんは立 法で、社会的包摂を促進したと言 及されています。さらに社会的 包摂を進めるために、社会におけ る問題意識の啓発と対話、共感の 広がりが求められ、そのためにも 移動の自由がより重要となつて くると思います。多様な人々が 様々な場所へ移動することで、自 己実現に繋がるのはもちろん、発 信にも繋がり、他者へ様々な気づ き、体験を与えることとなり、対 話や交流を生み、共感が広がって 社会的包摂の連鎖が生まれるは ず、と期待しています。

つれづれあらぐさ

あらぐさ福祉会は長岡京市にある社会福祉法人で、障害のある人たちの暮らしを支える事業を行っています。1986年に無認可の共同作業所を開所して以降、日中の通所から生活の場、ヘルパー事業所等、地域で暮らし続けるために必要なものを作り出してきました。今回の連載開始にあたり、「障害者の喜びと悲しみ、家族の喜びと苦悩、職員の働き甲斐と先が見えない苦悩…そういうことが浮き彫りになればと思います」とお話をいただきました。日々自分が経験していることや感じていることを通して、それぞれの一場面を綴れたらと思います。なお、内容については個人情報に配慮して構成しています。

場面② (距離をとった) 輪になつて、4人でコミュニケーションをとる

普段は車イスに座つて、テーブルに両腕をつきながら斜め下を見つめている彼女は、真っ直ぐな視線が印象的です。「今日のごはんは何?」

「次のおやつ作りはいつ?」と、常に何かを考えているような眼差しです。食えることが好きな彼女は、食を通して人とつながり、生活の楽しみを広げています。

通所でのおやつ作りでは、パソコンを使つてのメニュー選びから行っています。いちごムース・カルピスゼリー・スイカゼリー等、バリエーション豊かです。冷たい感触が苦手な彼女ですが、おやつを作って食べるという経験を続けてきた中で、ス

テンレスのスプーンを触つて混ぜるようになったそうです。

グループホームでは、食べものの話題は聞き逃しません。遠くで聞こえる「桃」や「アイスクリーム」という支援者の言葉に、「はあー」と声を出してアピール。今食べられないのが分かると、納得いかないという表情をしています。以前はキッチンでの夕食作りを見学していました。最近ではメニューの写真を見ながらヘルパーさんとの会話を楽しんでいます。

以前、彼女と一緒に外出した時のこと。おいしそうな匂いが漂うフードコートハンバーガーや天丼の前で、「ここ!」と顔を上げて昼食を選んでいます。食事後はサーティワンアイスクリームのキラキラしたショーケースを眺め、リビング用品売り場ではふかふかのクッションの感触を確かめて、店内散策を楽しんでいる様子でした。紅茶ショップで試飲を勧められた時は、口を開けてしつかり意思表示していました。

最近、彼女と他メンバー2人と自分、部屋で過ごす時間がありました。誕生日間近の人がいたので、「もうすぐ誕生日やけど、お祝い何でしょうねー」「プリンやといいですねー」と話していました。「あーい」と

その人が答えるより先に、それまで目を閉じていた彼女が顔を上げて「はあー」と会話に加わります。たまたまタイミングが合ったのかなと思つたのですが、「そっかー、プリン食べたんですね」と返すと「はあー」の返事がありました。「今はプリンないけど、誕生日に頼んでもらいましょー」と話すと、誕生日間近の人を見つめていました。自分がどこまで彼女の気持ちを汲み取れているのかは分かりませんが、「もしかしたら通じ合えたのかもしれない」と思えた瞬間でした。

中山 恵美子 (あらぐさ福祉会)

2+2 詩

「無題」

葉っぱの刃が、厚い暑い空気を切り裂いて、心地よい風がここかしこに吹き始めた。赤く赤く、梢はどんどん茜色に染まっていく。日の落ちる速度は日に日に早くなっていき、月は長居するようになったとつくづく感じる。終わりゆく夏を懐かしんでいる間にも、秋の日が駆け去っていくのは明らかで、それはあつという間、後には何も残らないだろう。

「土砂降り」

ざあざあど雨が降っている。じとじとと湿度が充滿している。まるで空気中に水が満たされているようだ。息苦しい、息苦しい。ただ呼吸をするだけで、がぼがぼと泳ぐようで、ぼちやぼちやと溺れるようで。息継ぎをするように、僕は風を求めた。

「変化」

苦手だったはずのものが好きになって。好きだったはずのものが苦手になって。否も応もない、問いかけの言葉どころか予兆すらなく僕のどこかが変わっていく。世界の何かが変わっていく。

「物陰」

部屋の隅。

カーテンの中。机の下。嫌なことがある度僕はそこに隠れる。膝を抱えて、椅子を持ち込んで。そうして座ってぼんやりする。否なことのを考える。なんでそうなったかを考える。どうしたらよかったかを考える。そうしてどうにもならなかったと諦める。

些細なことで崩れる自分が嫌になる。

そんな自分が生きていく自信がなくなっていく。

次の瞬間飛び降りれば

包丁で喉を突けば

楽になれるかと夢想する。

そんな度胸もなければ踏ん切りもつかず

結局そのまま。

立ち上がることなく座ったままで

このまま世界から消え去りたいと

誰の目にもつかない場所で思ってる。



障害のある人の
権利を守る 北障連から
濱中博

2018年度 北部学習会

講演「発達保障の道」



講師 河合隆平氏(灸
大学 現東京都立大学)

「歴史をひたし、社
会をひたし」

京都北部の障害者運動について
も深く学ばれています。特に与
謝の海養護学校の設立の歴史と
北障連の果たしてきた運動につ
いて研究されています。今後の
活動の在り方について大きな示
唆を下さいました。

講演内容の抜粋

障害のある子供たちが学校に行くこ
とが「当たり前」という現実、「学
校に行きたい」「学びたい」とい
う「みんなの願い」を、声をあげ、社
会に訴え、運動にすることにより実
現しました。

時々、「若い世代の人たちは、
制度があって当たり前、自分達

で作ろう」という意識が弱い
のではないか」というベテラン
世代の憂いを聞くことがあります。

自分たちが積み上げてきた実践や
運動のバトンを、次世代に手渡し
たいという思いを感じます。とはい
え、「制度があって当たり前」とい
うこと今日の実感も、歴史の到
達点として受け止めることが大切
ではないでしょうか。何もないと
ろから制度をつくってきた世代、
すでに制度ができあがっている世
代、それぞれが生きてきた歴史
の重みは比べようもなく、ひと
しい価値をもっています。世代
による感じ方や見え方の違いを
大事にしなから、お互いが育ん
できたねがいを語り合うこと
で、歴史がつむぎだす時間の層
は、厚みを増してきます。

厚く積み重ねられていく歴
史のなかでこそ、私たちはひと
り一人の願いを、世代を越
えて「みんなの願い」へと練
り上げていけるのです。

「みんなの願い」を育て合い、語
り合う経験が、歴史をつなぎ、今あ
る実践や制度をより良いものにつ
りかえる原動力になると思います。

2019年度 北障連学習会

今年の総会は、例年に増して

更に充実した内容でした。



峰山高等学
校 弥栄分校
分会の近江

裕之先生から「丹後・与謝
の高校再編とフレックス
高校のこれから」 来
年四月からの高校の特別支援教
育はどうなるのか」との内容
でお話をさせて頂きました。

◇ 近江先生のお話について

・弥栄分校にも、一割程度発達
障害の人（生徒）がおられる
ことに少し驚きました。また、
中途退学により引きこもりにな
る方もおられるかもしれな
い。いろいろな組織につな
げれば良いなと思いました。

・高校再編の話は、噂程
度の理解しかなかったのが、
今日のお話を聞いて大変な
ことだと思った。この丹後の
宝とも言える子ども達の事な
ので、もっと知りたいと強く
思いました。

・高校再編の話が良く分かり
ました。府教育委員会も時間
がなく慌てている状態だと感
じました。先ず学校ありきで
考え、詳細の分からない状態
で発進してしまつたら、生徒
達がかわいそうだし気の毒だ
と思います。混乱した際に
は誰が責任を取るのでしょうか
か？でも、声を上げていな
ければ、もっとひどい結果にな
っていたと思います。地域で
の活動が大切だと思いました

・丹後地域の高校の問題が分
かりました。伊根地域の方が、
本当に弥栄まで通学できるの
か？行きたくなくなつてしま
うのではと思いました。不登
校になり、引きこもりになる
危険性が高まる分校の統合は
地域潰れであると思いました。

丹後通学圏の生徒や親や地域
の人たちの願いに沿った制度
にするために、北障連として
今後も学習を続けます。

365歩のマーチ



19 オムカエ

保育園のお迎えはわが家では基本的には母の役割、たまに母が間に合わない時には事前に相談して私がお迎えに行くこともあります。朝、ゆいちくんを保育園に送る道中、「今日はかあか（もしくはとおと）がお迎え行くからね」といつも話しています。そんな日々を続けていると、次第にゆいちくんから「ゆいちくんも、おむかえするー」と何やらオムカエにあこがれをもってきました。

私がお迎えを担当したある日、夕方のお迎えを終え、家でゆつくりと母の帰りを待っていたこと。急に「かあか、おむかえいくー」とゆいちくん。母に何時着の電車に乗っているのか確認して、改札まで迎えに行くことにしました。

外は暗くなっていますががんばって駅まで歩き、「かあか！」「おい！」と大きな声で改札を通る人混みに向かって声を放ちます。しばらくすると、恥ずかしそうに人混みのなかから母が現れました。オムカエという大役を終え、母と手をつないで家路につくゆいちくんは何やら満足そうでした。その数日後…、また私が保育園に迎えに行く日がありました。家に帰ってのんびりしたいなあ…と思っていたところ、予想通りゆいちくんから「かあか、おむかえ、いくー」と提案がありました。その日は母親の到着の時間を聞かずののらりくらり迎えに行くことに。いつものごとくご機嫌に歩くゆいちくん。すると、駅まで半分も行かないうちに母親にば

つたりと会ってしまいました。母親は今日もお迎えにきてくれたことににこにこ。ところが…。ゆいちくんは母親を通り過ぎて「オムカエ、イグー」と不満そうに歩みを進めています。ゆいちくんにとつてのお迎えは、駅まで行つてようやく達成されるようです。仕事でへろへろの父と母は駅まで行く元気もなく、「オムガエ、イグーー」と泣くゆいちくんを抱え、「ありがとうね」などとよくわからない言葉をかけながら家に帰りました。最近では、「〇〇するつもり」という本人の目的がしっかりしてきて、その目的が達成されないと怒ったりやり直したりするようになってきました。何事も相談してかからでない、ごまかしがききませぬ。

※

「ジュンバン」「コウタイ」と保育園で覚えてきたことを家でも言うようにになりました。保育園では



安藤 史郎（あかひつねの園）

知っ得情報

インフルエンザ予防接種

松本 美津男

重度内部障害者が60歳から対象となる高齢者インフルエンザ予防接種の代表例として、京都市の実施内容を紹介します。

〈対象者〉

- (1) 65歳以上の人
- (2) 60～64歳で、心臓、腎臓、呼吸器の機能に障害があり日常生活を極度に制限される人
- (3) 60～64歳で、ヒト免疫不全ウイルスにより免疫の機能に障害があり日常生活を極度に制限される人

詳細は、次のURLから確認し、かかりつけ医と相談を。

<https://www.mhlw.go.jp/topics/bcg/tp1107-1h.html>

〈実施期間〉

10月15日～1月31日

〈料金〉

1回限り2,000円

※自己負担区分証明書の交付を受けて提出すれば、所得125万円以下の人は減額、市民税非課税の人、生活保護受給者等は無料。

〈問い合わせ先〉

京都市高齢者インフルエンザ予防接種コールセンター

電話：0570-000-774（固定電話からは市内料金）

※スマホ等は、かけ放題等でも料金発生。

医療衛生企画課

電話：222-4421 FAX：222-4062

あなたもぜひ 仲間に



サロン・サークル・地域活動展開中
生活支援スタッフ(資格不要)募集中
介護職員(資格要)募集中

ひとりぼっちの高齢者をなくそう
元気な高齢者はもっと元気に

「よろず相談」承ります(随時)



あなたも支える存在に

京都市北区紫野東野町1-5
電話075-432-3636

命の平等をかけた、 無差別平等の医療と 福祉の実現をめざす

働くひとびとの医療機関です

看護師・薬剤師・医師や医療技術者を

目指す方をご紹介ください



京都民主医療機関連合会

〒615-0004 京都市右京区西院下花田町21-3 春日ビル4階

TEL 075-314-5011(代) FAX 075-314-5017

Home Page <http://www.kyoto-min-iren.org>

e-mail: info@kyoto-min-iren.org

ありがとうございます

分担金 京都府視覚障害者協会 ちひろカレンダー 牧久江（敬称略 2021.10.10）

シンポジウム「第二回子どもと親のSOSをキャッチする仕組みを考える」を終えて

大西 里江

全国各地から130人を超える皆さんがオンラインで参加しました。当日の内容と寄せられたたくさんの感想から、いくつかを紹介します。テーマは、高校卒業後の進路、暮らしについて親として考えてきたことと、現在の状態やこれからの不安です。

*

*板野さんは、在宅支援を受けつつ、子どもが地域の有名人になる日々の工夫や、地域つながりや家庭での工夫で、現在は落ち着いて生活している様子を話しました。

*沖田さんは、グループホームで生活する子どもの話で、グループホームは在宅支援なので、衣替えから病気になった時はもちろん親の負担が続く現状を話しました。

*大西さんは、施設に入所していても、障害が進行し重度になった時に退所させられた経験とコロナ禍で入所している子どもとの面会ができない状況が続いていることなどを話しました。

*竹口さんは、成年後見制度の曖昧さ、不備、そして制度を使うことの難しさなど現状の話をしました。

*佛教大学の田中智子さんから、「今の社会に安心して障がいのある人を託せるかということを知りたい。望ましい支援の仕組みについて、当事者の声を届けていくことが重要」と、課題をまとめました。

*

<オンラインで見ていただいた参加者から、たくさんの感想が届きました。>

- ・当事者である親御さんの発言が多いが、ヘルパーや事業所さんから視点で、どうすればいいのも考えたい。
- ・家族介護ありきで制度、社会が成り立っている現実の中でどうしていくか？一人の支援より福祉理念に根差した組織と法人を作る、社会や施策、行政にきちんと向かい合うことが必要。
- ・サービスや制度は整いつつあるが、契約であり一生保証されてない、方針の決定や最終的なことは親で、親がいないと成り立たないサービス利用を実感。障がいのある子だけでなく、親やきょうだいの生活や人生があることも知ってほしい。
- ・SOSを発信出来ない親御さんをどのようにして救っていくかが今後の課題です。
- ・学校の先生が障がい児の進路について学んでいない現実を憂います。それでは、親が追い詰められることが明らかです。保護者の思いを理解せず安易な進路指導に憤りです。
- ・病気が分かり、制度利用が必要になり利用方法の複雑さ、利用の限界を感じているが、誰に相談したらいいのか分からないなか、色んな方の話を聞いて良かった。
- ・障がいのある子の成長を楽しみに出来る社会を作るため、私達に何が出来るのか？考えるきっかけになった。

*

<たくさんの意見を受けての実行委員会では>

シンポ参加をきっかけに、高校2年の障がいのある子どもを育てるお母さんが会議に参加して下さいました。家庭での暴力やきょうだいへの影響、自分自身の仕事のことなど悩むことがたくさんあり、次から次に起こる出来事に疲弊する毎日。我が子だからと頑張っていくかといけなと思うが、「恐怖が憎しみになりそうになる。」との一言が、今の困難の全てを語られたと感じました。

最重度の人が行き場のない進路では、誰もが安心して暮らすことが出来ない。支援を切り捨てられないようにするには、当事者の親の声を聞かないといけなと実感したシンポでした。